

# イスラマバードでの現地業務を終えて

## 協働による達成感

耕種は、2019年よりパキスタン国バロチスタン州（以下、バ州）を対象地域に、農業普及員の能力向上プロジェクトに携わっている。これまで普及員向けの研修実施を通して、農民への適切な技術や知識を普及させることを目標に活動を行ってきた。そして2023年2月、約4年間の現地での業務を無事に終えることができた。

このプロジェクトにおける普及員の能力強化の取り組みは、首都イスラマバードにおける集合研修とバ州州都クエッタでの集合研修、そして各普及員の担当地域での農家調査と普及活動で構成されていた。しかしながら、日本人専門家は、治安面の制約から、対象地域であるバ州へ立ち入ることができなかった。そのため、バ州内での研修実施や普及活動のモニタリングについては、Counterpart（以下 C/P）と協働しながら、National Staff（以下、NS）を活用して遠隔で運営・管理を行ってきた。

2019年3月から現地業務が始まり、同年7月頃から本格的に遠隔運営・管理による研修実施が動き出した。そして、2020年3月以降の COVID-19 感染拡大をはじめ、サバクトビバッタの大発生や襲来、アフガニスタン政変による難民流入の影響、2022年の夏季豪雨・洪水、政権交代等、想定外の事態が次々に来襲した。特に COVID-19 の感染が拡大中は、従来型の集合研修や普及活動実施ができない時期が一年以上も続いた。それでもオンライン研修や参加者全員の事前PCR検査など、プロジェクト活動を続ける工夫を凝らした。新しい活動を管理するため、オンラインによる週例会議と SNS を活用した個別の連絡を通して、C/P や NS と密接に連携し、運営・管理面で協議を重ねた。それぞれの業務の枠で特有の事案が発生するため、迅速かつ柔軟な対応を迫られたが、その度に経験値が、C/P や NS、そして日本人専門家に積み重ねられていった。最終的には、多くの課題に直面しながらも、大きな問題もなく、現場活動を完了できたのは、連携のたまものだったと思う。

そして、数々の経験の積み重ねのおかげで、最後の研修対象グループでは、不思議なぐらい研修実施や普及活動がスムーズに実施することができた。

2023年2月の最後の現地業務では、最後の研修対象グループのフォローアップワークショップ、プロジェクト評価会議、第3回合同調整委員会を立て続けに実施した。会議の中で C/P からは、プロジェクトで習得した普及能力や実施経験、得た普及教材等を活かして普及活動を継続させていく意思が表明された。また「これまでは農業行政官を対象にした研修は多かったが、各地域の現場にいる普及員の能力強化に着目したプロジェクトはかつてなく大変有意義だったこと」「広大なバ州で、様々な外部要因があった中、すべての活動を実施できたこと」、これらの尽力への謝意が述べられた。これらの会議後、プロジェクトは、これまでの支援や各取り組みへの感謝の気持ちを伝えるために、研修講師を担当した功労者である、イスラマバードの国立農業研究センターとバ州の普及局・試験場のリサーチャーやオフィサーへの感謝式を執り行った。そして、C/P 機関からは、我々の活動を記念する植樹式を主催してくれて、両者の今後の繁栄を誓った。

NS とは、一人ひとり面接し、これまでの活躍に謝意を伝えるとともに、これまでの思い出や苦労話を振返った。皆それぞれが自信に満ち溢れた表情をしながら、今後の抱負を語っていた。この4年間で様々な困難に直面しながらも C/P や NS と密接な連携のもと、協働することができたことに「達成感」を感じるとともに、仲間として今後とも交流を続けていきたいと改めて感じた。



ワークショップ後、研修員、C/P、NSとの集合写真